

2016年12月12日

札チャレラジオ通信 第48回

加納：三角山放送局をお聴きの皆さんこんにちは。月曜日午後3時、札チャレラジオ通信のお時間が始まりました。札チャレラジオ通信は、自立を目指す障害のある人が「ITでマザル、ハタラク、拓き合う」社会を創りたい、そんな思いで活動している札幌チャレンジドが、活動内容をお伝えする番組でございます。今日は、私加納と就労グループの林さん、千葉さんの3人でお伝えしていきたいと思います。こんにちは、よろしくお願いします。

林：よろしくお願いします。

千葉：よろしくお願いします。

加納：やあ雪降りましたね。

千葉：降りましたね。

加納：雪かきで疲れてない。

林：疲れましたね。

加納：疲れてる。

千葉：腰もふくらはぎもパンパンですね。

加納：若干うちの事務局で本当に腰を弱らせちゃって、今日はお休みになった人がいますが、本当に気をつけないとね。私今早番だったんですけど、朝8時くらいに来て。うちの事務所、北園ビルの所にスロープがあるじゃないですか。スロープに雪が20センチくらいだーっと積もっていて。とりあえず今日はその雪かきだけはしましたけれども。

千葉：今日は皆迎えに行ったり。

加納：朝てんやわんやでね。今日は朝、実は朝礼やってなかったんだよね。

千葉：そうですね初めてなぐらいですね、この1年で。

加納：何かあわただしい朝を迎えていましたね。今月の札チャレラジオ通信はこの番組が始まりましてもう1月からですから1年ということで。この番組自身が1年間限りの放送ということですので、そろそろ閉めの時期に入ってきてまして。札幌チャレンジには、四つのグループがあります。今月の4回はそれぞれのグループの人に来ていただいて、今までの感想を聞いたりですとか、来年に向けての抱負を訊いたりしておりますので。そろそろ中身に入っていきたいと思いますが。まずは林さん、1年間のラジオを通じての感想を教えてください。

林：どんなふうになるのかなっていうのが最初なかなか分からないままスタートして。最初ゲストに呼ばれ、お話をさせていただいてここもう早く1年経つんだなと思うと何か早いなっていうのと。結構がんばったなって。

千葉：がんばりましたもんね。

林：がんばりましたね。

加納：結構嫌々やっていたというか緊張してたもんね。

林：緊張っていうか今日はMC側じゃないからだいぶ緊張してないんですけど。いや本当に回してと言われたときの緊張感はひじょうにプレッシャー、すごかったですね。

加納：今までの自分の人生でもこんなに緊張した記憶はあんまりない

林：いやなかなかないですね。

加納：そうですか実際ラジオやってみて、プライベートというか趣味でやるのではなくて自分の今の仕事に関わるところでラジオを通してどんなふうに感じましたか。

林：やっぱりいろんな方とお話しする機会っていうのがあらためて時間としてもらえて。勿論メンバーの皆が来てくれたりとか、お取引先の方が来てくれたりとか。分かっていたようであらためて「あ、そうなんだ」とかいろんなこと、聞くことができたなっていうのがすごくプラスになったなっていうのと。それをこういう電波に乗せていろんな人に聞いてもらえるっていう機会っていうのがなかなかないことで。そういう機会になったなっていうのを感じました。

加納：なるほどね、千葉さんはどうですか。

千葉：僕もしゃべるのはそんなに緊張しないほうなんですけれど、やはりこのライブの感覚とゲストをお招きしたときだと本音では話すんだけどやっぱり一抹ちょっとした緊張感を持って。でやっぱり打ち解けながらも言葉に責任を持ってみたい意識が働くん。やはり日常ではなかなかない緊張は、感じました。けどもその分「やあ忘れがたいな」とか「あ、なるほどな」て思いもずいぶんいただきましたし。それが仕事の力につながっていくなということを実感した1年だったと思います。

加納：なるほどね、そうですね。言葉の力って、ラジオってすごいよね。映像としては見えないからこそ言葉の大切さとか言葉の力を感じますよね。

林：本とですよ。

加納：就労グループというのは札幌チャレンジドが企業から受けたお仕事を札幌チャレンジドの事務所や家でパソコンを使って働く障害者の人の支援をするというか。一緒になって業務を進めていくってね。ほとんどの人が雇用契約もしていますから、本当に一緒に働く仲間としてインターネットの裏側を我々は支えてるとそんな感じだと思うんですが。なので実際に働いているメンバーの人とか、企業の人とか様々な関わりからゲストに来ていただいたんですが。林さんは何か印象に残っているゲストとか、このゲストのこの一言が、みたいなものって何かありますか。

林：そうですね、来てくださった方皆さん印象に残っているんですけども。わざわざ東京から来ていただいたインフィニトラベルインフォメーションさんの山崎部長さんのお話のとき、わざわざ来ていただいたときとか。ちょうどその時岡野さんの誕生日で、岡野さんの誕生日にラジオするという会だったんですけど。その時に「一緒にできて良かった」というふうに。「札幌チャレンジドと一緒に仕事できて良かった」というふうに言っていたのがぼくらはメンバーも勿論力になるし。ありがたいなって思って、何かこうぼくもいいことだし、相手にとってもやっぱりいいことだっていうことで。お互いにとっていい関係がつくれているんだなっていうのをちょっとあらためて確認できたときに「ああ、良かったな」というふうに。そういうのが印象に残っているかなっていう感じかな。

加納：いいですね、そうなんですよね。我々は障害のある方の働く支援をしているいわゆる福祉団体なんだけど。企業から仕事を受けるっていう意味ではこれは、完全なビジネスなわけ。だからこそ「ビジネスパートナーとして一緒にできて良かった」と言ってもらえてこそ、そこがスタートラインというか。それがないと長続きもしないだろうしね。ありがた

いですね。千葉さんは、どうでしょう。

千葉：そうだな、ヒューマンリソースの倉めぐみさんに来ていただいたときに、倉さんは人材育成のお仕事の柱であって。ぼくたちも人材育成ということが本当に大事だし。そのお話をしたときに、「最初からだめな社員とか職員とかそういう人いないんじゃないか」ってことおっしゃっていたんです。で「それを育成する側がだめな社員にしたり、いい社員にしたりするんだよ」という本当にあたりまえこと、シンプルなことを本当に熱意を持っておっしゃられたのが印象に残っています。でやっぱりその中で「皆と共に支える側も支えられる側も経営者も一緒になってこうやって育っていこう」とそういうことをおっしゃっていたんです。あらためてそういう人材、人の繋がり、組織いろんなこと考えさせられて。ひじょうに印象に残っていますね。

加納：なるほどね、そうですね。ぼく何かメンバーの人たちが仕事をする姿が成長していく、それに一番喜びを感じますよね。さっきの確かにクライアントさんに「ありがとう」と言ってもらえるのも嬉しいんだけど。ただお金を得るために働くのではなくて、人間、人が成長していく重要な関わりとして仕事があって。仕事以外でも家族との関わりとかいろんな関わりで人は成長していくんだらうね。すごいそういう意味ではね、一緒になって成長させてもらってるって感じがしますよね。ぼくはラジオに出ないときには後から録音で聞いたりしてるんですけど。在宅就労のメンバー何かラジオの前で明るく元気に話している姿。普段なかなか在宅にいるからぼく何かはもう仕事の接点がないので。明るいいい声を聞いているとすごく何か「こういう機会があったから、こういうふうにつながる。またさらに知れるんだ」と思いますけどね。

千葉：明るさが知れるっていうのが本当嬉しい。

加納：やあいいよね。

千葉：やあいいですよ。

加納：仕事をしてる時そんな格拉グラ笑わないですしね。こういうラジオで一緒になって何か本人のまた違う側面を見れるなっていうのもラジオをやらせてもらったからかなと思いますけどね。はい、ありがとうございます。では、もう半分くらいの時間が経っていますので。今日のリクエスト曲は、千葉さんが選んでくれたのでちょっと曲紹介をしてください。

千葉：ボブ・ディランさんがノーベル文学賞取りましたね。ニュースありましたけども。ボブ・ディランはノーベル文学賞の受賞式に出られなかったそうです。そのかわりパティ-

スミスがもともと呼ばれていて。自分の歌を歌おうと思っていたんだけど、やはり一番影響を受けたボブ・ディランの歌を歌いたってということで歌ったそうなんです。で、素晴らしい歌なんです。『A Hard Rain's A Gonna Fall』まあ激しい雨っていうふうに皆知ってますけれど。これ途中で感極まって「ごめんなさいもう 1 回やらせて」て言って歌いなおすっていうライブがありまして。その音源を今日皆さんに今未だそういうふううにうねっているんだって。ボブ・ディランにしても、パティ・スミスにしてもやっぱり社会の課題とか問題とか。そういうことに感心を持つ人、増やしてきた人たちだと思うので。まあそんな意味でも本当にリスペクトという気持ちをくみながら聞きたいなと思っております。

加納：三角山放送局から札チャレラジオ通信をおとどけしております。今日は就労グループの林さん、千葉さんに来てもらって就労グループのまとめのような話を聞いていただいております。では、残り 10 分でございますので、後半のパートでは就労グループの来年の抱負とか取り組もうとしていることを聞こうということになっているんですが。今日はリーダーの佐藤美貴さんがどうしても急用で出演できないということで、残念ということになるので。リーダーはいませんがそれぞれのグループのメンバーとして自分の抱負であったり、グループで「来年はこういうことに力を入れていきたいな」ということを日々意見交換しているかと思うんで。教えてもらいたいと思いますが、「林さんどうですか」。

林：そうですね抱負というか今こうやって続けて勤続してくれてるっていうか、一生懸命働ける状況がジョジョに人数が少しずつ増えているような状況なんですけれども。この間勤続 10 年●の方の。

加納：表彰が第 1 号出ましたね。

林：そういった感じで、「やっぱり長く札チャレで働きたい、働ける」というような人が出てきてくれたらいいなということ。またそういうふうな形でさっき人材育成という話も出てたと思うんですけども。人を育てていくっていうのと、一緒に育てていくっていうか、そういう仲間がどんどん増える。どんどん増えていったらやっぱりちょっと大変かな。

加納：そのときは職員も増えますから大丈夫です。

林：一人でも多くの方が「札チャレ働きやすいな。札チャレで頑張りたい」て引き続き思ってくれるような状態を引き続きつくっていききたいなとは思っています。

加納：千葉さんはどうでしょう。

千葉：今林さんがおっしゃったことにつけると思うんですよね。その日々の中からは見え
ないこととかそれまでの日々とまたこれからが見えてきたりとかすると思います。日々何
もないってことはほぼないような気がするんですよね。いい意味でも悪い意味でもね。
その中で職員は職員、メンバーはメンバーそうではなくてどこかで相談しながら誰かと誰
かが工夫して誰かと誰かが力をとって皆の力にしようって言ってやってきているんで
ね。そういう就労グループの力、こういう胆力みたいなものを本当にまた来年も大事にして
いきたいなというふうに思っています。

加納：就労グループというのはまさに札幌チャレンジドのメンバーと一緒に仕事をす
るというグループですね。仕事をするためには仕事が無ければ仕事にならないわけでね。本
当に就労グループとしての仕事が始まったのは2005年の12月から企業さんの決まった
仕事が始まって。それまではスポットの仕事だったからなかなか固定的に働けなかったん
ですが。それからもう11年経っていて、長く仕事をやらしていただいている企業さんい
て、「本当にありがたいな」と思っています。また一方仕事って永遠ではないですよね。わ
りと7年8年やっていたけど残念ながら終わってしまったとか。最初は規模拡大していた
けど今はひょっとして小さな規模になったものとか。そういうものもあるわけですよ。でも
働いている人はそこに振り回されたんじゃないからやっぱり私たちは組織としていか
に安定的に仕事を確保していくかっていうことが大切だなって思うんですが。林さんちょ
っとこの放送はね、いろんな企業の方が聞いている可能性もあるわけですよ。車乗りながら、
運転しながらね。ことに界隈で仕事を一生懸命している人が聞いているかもしれないから。
企業の人に札幌チャレンジドはこんなふうに仕事をやってますとか。ちょっと札幌チャ
レンジドのことを少しでも何か理解してもらえるような。我々の仕事にたいする熱意であ
ったり、ポリシーであったりいろいろあると思うんですけど。突然降っちゃってあれですけ
ど。企業の人向けに。

林：そうですね、やっぱり皆一生懸命取り組んでくれるなというのが、仕事を一緒にやって
思うところで。すごくまじめに真摯に取り組んでいます。ちょっとしたこととかでもいろ
いろ細かく説明しなきゃ伝わらないとかいうこともあるかもしれないんですけども。そ
ういうしっかりと企業さんと一緒になってお仕事をさせてもらっているというのがこの
間のさっきも言っていたインフィニさん何かも特にそうなんですけれども。ほくらの方で
どうしても分からないことが出てきたときにちゃんと向き合っ一緒にやっていただくっ
ていうことで。何て言ったらいいのかな。

千葉：こう、最初から可能性とか実感とかが掴めない見えないではなくて。何か「お、お、
叩けば響くじゃない」みたいなね、そういう力はあるよね。就労グループのメンバーは特に。
やったことのない業務、領域、分野であってもやってみただ中でやっぱり適正というものが輝

いていて。そして企業さまにも少しレクチャーをフィードバックをいただきながらじょじょにその道のプロフェッショナルとして開花していくというようなね。いきなりではないけれどもね。そういう力強さみたいなものはあるな。さっき林さんが言った「まじめさ、真摯な部分」というの。

加納：本当仕事することの喜びであったり、プライドであったりねとにかくまじめだよ。いいかげんなことをする人本当にいなくてね。だからこそ時間がかかることも、多いんだよ。まじめだから時間がかかるんだよ。一つ一つのことに真剣に悩んで、考えてそこはもうちょっとスルーしてもいいんだよというところも、一生懸命考えてくれる。でもそれが結果として次何か仕事をする総合的な力に結びついているのかなと。表面的なことだけおっかけちゃうと、やっぱり力というのはそこまでしつかないような気がするんだけどね。どんな仕事でも皆ひじょうに一生懸命考えて、一生懸命工夫をしながら、悩みながら日々やっているような気はしますが。

千葉：本当ですね、ぼくもそう思います。

林：そうですね、いろんなことを考えてくれて「この方がいいんじゃないだろうかとか。この方がクライアントさんが喜ぶんじゃないだろうか」ということを一生懸命考えてくれるなど、そういうのはすごく感じますね。

加納：ぜひ三角山放送局をお聞きの企業の方とか、フリーランスの方でも結構ですけども我々は主にデータエントリーということで、インターネットでは様々な便利なサービスが提供されていますが。そのサービスがなりたっているのは実は裏側でしっかりとしたデータが登録されているからそういうサービスがなりたっている分野が多くて。そういうデータエントリーを本当に丁寧にミスなくやっていますんで。ぜひ、「あ。うち、おれ、ぼくはやっていないけどぼくの知り合いにそういうことやっている会社の人いるな」とかですね。そういう人がいたら、ぜひぜひご紹介。

千葉：こんなことできるのかな、できないのかなと思ったら声をかけていただきたいですね。

加納：相談してほしいですね。

千葉：そうですね。

加納：もっと単純なことをいえば「いや、会社に名刺が1000もあるんだけど、それ1回

データにしたいんだけど」みたいな話でもいいですよ。はい、ぜひとにかくそういうパソコンを使って何かお仕事というときは、札幌チャレンジドが。札幌 011-769-0843 午前 9 時半から午後 5 時 30 分まで営業しておりますのでね。ぜひお問い合わせいただきたいですよ。そしたらお二人がすぐお客様の所に飛んでいって。

千葉：あ、行きます。

加納：お客様のまずお話を聞かせていただいて。それにたいしてできないこともあるかもしれないけれど。

千葉：それも本当お話しかがってということの中でね。

加納：ぜひ来年も一人でも札幌チャレンジドで出会って良かったと思えるメンバーさんが増えて皆が一人でも多くの方がハッピーになれるように頑張っていきたいですね。はい、では今日も札幌チャレンジド通信最後までお聞きいただきましてありがとうございました。来週また月曜日午後 3 時から 3 時 30 分までおとどけます。さようなら。

林：さようなら。

千葉：さようなら。